**つのキースタイル：黄土色の黄瀬戸（16世紀後半）**

黄瀬戸とは、黄灰釉という特殊な釉薬を使った陶器のこと。瀬戸黒と同時期に作られたが、茶道具よりも食器や香炉・花器などの装飾品に使われることが多かった。下の大鉢は、黄瀬戸の代表的な作品である。

この黄色っぽい色は、黄色の下絵の上に褐色の鉄釉と緑色のタンパンをむらなくかけたものである。焼成中、空気中の酸素によって、これらの鉱物が天然の灰釉に含まれるシリカなどと結合して、淡い黄色になる。黄味が強く、脱滴（釉薬の結晶化）によるザラザラとした質感をもつ黄瀬戸は、「あやめ手」、あるいは「油揚手」と呼ばれた。

明時代（1368–1644）の中国の南方から輸入された三彩は、美濃の黄瀬戸に強い影響を与えた。この時代の三彩は、深い緑色の釉薬をベースに、黄や紫などの色を使った彫刻が施されているのが特徴である。また、三彩に使われる緑釉は、美濃焼の織部にも共通する要素である。